

第2回 市民参加の仕組みづくりのための検討会

会 議 録

日 時：2025年9月11日（木）午後5時開会
場 所：札幌市役所本庁舎 13階 1号会議室

◎開 会

○事務局（藤田推進係長） お時間となりましたので、第2回市民参加の仕組みづくりのための検討会を開催いたします。

事務局の藤田です。どうぞよろしくお願いいたします。

本日から新たにオブザーバーとしてご参加いただく方をご紹介します。

総務局の前田広報部長でございます。

建設局雪対策室計画課の玉上計画係長でございます。

それでは、お手元の次第に沿って進めたいと思います。

次第1の議事です。

ここからは、座長に進行をお願いしたいと思います。

鈴木座長、よろしくお願いいたします。

1. 議 事

○鈴木座長 皆様、お疲れさまでございます。座長の鈴木と申します。

私のほうで議事進行を務めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、議事に入らせていただきます。

前回8月4日開催の第1回の検討会では、本検討会の目的や今後の進め方について確認し、モデルケースとなります「持続可能な雪対策の在り方検討」について、札幌市が抱える現状や課題の情報共有がなされました。また、雪対策に関するアンケートの調査結果が報告され、情報提供が市民の意識に与える影響などについて意見交換を行いました。

本日は、10月に開催が予定されております市民ワークショップについて議論をしてまいりたいと思います。

それでは、議事の（1）市民ワークショップについて、事務局より資料のご説明をお願いいたします。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 事務局の寺川でございます。本日もよろしくお願いいたします。

資料に基づきましてご説明をさせていただきます。

本日は、まず、ワークショップの全体像をお示しさせていただいた後、それぞれの論点や議論のためにご用意する予定の四つのシナリオなどについて順を追ってご説明させていただきたいと思います。

まず、1ページをご覧ください。

ワークショップの全体像です。

左の開催概要のブロックからご説明いたします。

目的は、2点ございます。

1点目は、20年先から30年先の雪対策のあるべき姿について市民議論を行い、雪対策審議会での議論や市民会議の論点設計のための基礎資料として活用することです。

2点目は、新たな仕組みづくりの観点から多様な意見を引き出すための議論のフレームを構築することで、今後、テーマが変わっても汎用的に使うことのできる話合いの形をつくっていききたいというものです。

続きまして、名称ですが、雪対策の未来を考える市民ワークショップとしております。

日時は10月19日（日）午後1時から5時半まで、会場はTKP札幌ホワイトビルカンファレンスセンターであり、JR札幌駅に至近で交通の便もよいロケーションになっております。

対象は18歳から79歳の札幌市民40名程度としております。住民基本台帳から3,000人を無作為抽出し、既に案内状を送付しているという状況です。今後、応募者の中から、年齢、性別、居住形態、居住地域などの属性バランスを考慮し、最終的に7グループを構成したいと考えております。

進行ですが、メインの司会と各テーブルにファシリテーターを配置したいと考えております。

論点と問いについては後ほどご説明させていただきますが、今回、論点を三つ設定しております。1点目が限られた資源で何を優先するのがよいか、2点目が雪をどう受け入れ、どう支え合うのがよいか、3点目が大雪の日の暮らし方のルールです。

備考となりますが、参加者には謝礼を5千円お支払いする予定です。それから、開催1週間前をめどに資料を事前送付し、会議当日にも持参していただくことを考えております。

次に、中央の当日の流れをご覧ください。上から時系列順にご説明いたします。

まず、12時45分から受付を行うとともに、1回目のアンケートを行います。アンケートですが、この日は3回行う予定です。13時にオリエンテーションを開始し、13時10分から情報提供、13時半から2回目のアンケートという流れです。その後、議論を開始し、13時35分から年代別の議論を57分間行います。それから休憩を挟みまして、ここまでで出てきた質問に対し、行政から回答する全体の会議を15分間行います。

後半は、世代をミックスして議論する予定で、73分の時間を確保しております。その議論の成果をテーブルごとに模造紙でポスターを作成していただき、16時10分からはそのポスターを見て回るギャラリーウオークとその時点での個人の考えを可視化して共有することを目的としたシール投票を行い、16時25分からはグループごとの発表で成果を共有します。

最後に、休憩を挟みまして、17時5分からテーブルごとと全体での振り返り、17時25分に最後のアンケートを取って終了となります。

次に、右の解説のブロックをご覧ください。

アンケート調査は3回のタイミングで取りまして、意識の変化を測定する目的があります。

情報提供については、制約条件、例えば、担い手が不足している、従事者が高齢化しているといったことや予算的な制約があるという点、それから、これまで実施してまいりました市民アンケート結果を共有するとともに、議論で使う選択肢のメリット、デメリットを分かりやすくご説明したいと考えております。

その下の同世代ディスカッションでは、雪のある暮らしのプラス面とマイナス面を共有して議論を深めるため、複数の未来像と支持理由を話し合っただき、その世代として大切にしたい原則をまとめたいと考えております。

その後の世代ミックスディスカッションでは、各世代の意見を持ち寄り、ご意見を探って、三つの論点ごとにテーブルでの結論を出していただき、ポスターを最終的に作成します。

それから、ギャラリーウオーク&シール投票では、先ほどもご説明しましたが、各テーブルのポスターを見てもらった後、全員から三つの論点ごとに優先度の高いと思われるものを一つずつ選んで投票していただこうと思っております。

このように、様々な工夫を行いながら、個人の意見とグループでの対応の結果という二つのデータを収集、分析し、今後の検討に生かしていきたいという考えです。

2ページです。

ワークショップの論点ということで、論点を抽出した過程についてご説明したいと思います。

まず、左側のブロックの条件Aから条件Dをご覧ください。

Aの人の制約ですけれども、除雪の担い手の高齢化が進み、担い手不足が見込まれています。繁忙期には集中的に人手が必要ですが、従事者を増やすことには課題があるという状況です。

Bの予算の制約ですけれども、雪対策費が年々増えております。これに加え、ほかのサービスとのバランスも考える必要があるという状況です。

Cの新技術の不確実性ですけれども、自動運転といった新技術への期待が高まっているものの、不確実なものであり、短期的な効果も限定的であるということです。

Dの気候の不確実性ですけれども、局地的、集中的な降雪、急な暖気など、気象の変化という要素があるということです。

次に、右側の市民意見ですが、アンケート結果から得られたものをEからHまで並べております。

Eの除排雪の強化と安全志向では、除排雪の強化要望が一定あることに加え、情報提供をした場合、歩道や交差点の見通しへの安全意識が高まる傾向が見られました。

Fの地域協力への支援では、地域で除排雪をする場合の市の支援を求める声があることも分かっています。

Gの技術への期待ですが、担い手不足への対策としまして、新しい技術、設備の導入に高い期待が寄せられております。

Hの受け入れ意識では、情報提供後に雪の不便さというものを一定程度許容する意識への変化が見られました。

右側の三つの論点をご覧ください。

これらは、条件と市民意見を掛け合わせて導き出したものです。

①「限られた資源で、何を優先するのがよいか」では、人や予算には限りがある一方、生活道路の除排雪強化や安全意識への高まり、新技術への期待があります。全てを同時に実現することは困

難ですので、何を優先すべきかを参加者と一緒に考えていきます。

②「雪をどう受け入れ、支え合うのがよいか」では、サービス維持が困難になる可能性があるという現実に対し、地域協力への支援、それから、不便さを許容する意識も一定程度見られる中で、どのような条件で不便さを受け入れ、地域の力と行政の支援を組み合わせしていくべきかを明らかにします。

③「大雪の日の暮らし方のルール」では、大雪や路面悪化の予測が困難な中、社会全体の行動ルールの必要性を考え、市民による生活の工夫の可能性を探ります。

以上のように、制約条件と市民意見を総合的に分析し、三つの論点に絞り込んでおります。それぞれ相互に関連し合う複雑な課題となっておりますけれども、今回のワークショップでは、一つずつ丁寧に対話を重ねながら方向性を導き出したいと考えております。

次に、3ページの過去の手法からの学びです。

このページでは、過去の市民議論の課題を踏まえ、今回の設計で改善する点などについてご説明したいと思います。

特に具体的な課題としましては、年代ごとの本音をどう引き出すか、抽象的な表現、情報提供のバランスに対する工夫を取り入れたいと考えております。

左側のケース1としまして、未来の成人式を考える市民会議です。これは、市民41名ずつにより、それぞれ1日をかけてミニパブリックスの縮図型、同世代の議論型の2方式を施行したものです。論点として主体、場所、財源を設定し、市民に対話していただきました。

運営方法に関する結果としましては、市の縮図型では同世代の方ともしっかり話したかったという意見も若年層から複数見られ、一方で、同世代の議論型では仲間意識のような話しやすい雰囲気形成される様子も観察されました。

中央の成果と課題ですが、この結果から世代ごとの本音や多様な意見をより引き出すには同世代で議論をした後にミックスするというようなハイブリッドの対話が有効ではないかと考えるものがあります。

一方で、課題としては、情報提供のバランスに関する評価が事後のアンケートでは低かったという点が挙げられました。要因はいろいろあると思うのですが、一つとして、行政からの情報提供の方法について、特定の結論に誘導しているのではないかと受け取られ方をされる潜在的なリスクがあったのではないかと推測しているところです。

次に、下のケース2の北海道大学・雪対策の未来を考えるワークショップですが、本年6月に北大生14名を対象に2日間実施したものです。

ワークの流れとして、まず、雪のプラス面とマイナス面、理想を共有しました。次に、現実的な政策の方向性を選択するために三つの方向性をお示し、議論をしていただきました。一つ目が雪対策を強化する、二つ目が現状維持、三つ目がほどほどの雪対策にとどめるという選択肢について議論をしていただきました。その後、さらに、行政、市民、企業の役割分担を具体的に考えていただくという手順を踏みました。

結果としては、段階的に3回の意識調査を行ったところ、図①は市民アンケートと同様の設問になりますが、雪に対する心構えを継続したものです。緑色の棒グラフが議論後の結果ですが、最終的には、雪に対する心構えは2が多く、不便さをやや許容する態度に変化しております。

図②は、三つの雪対策の方向性について議論前と議論後で結果を比較したのですが、最終的には、議論後において、ほどほどに留めるというものに6割以上の支持が集まっているという結果になっております。

中央の成果と課題ですが、学生への事後アンケートからは、自分では気づかなかったことに気づけた、多角的に物事を見ることが重要だと改めて感じたといった感想が寄せられました。これは、議論を重ねていくこともさることながら、まずは理想を語り合いながら徐々に現実的な議論をしていくという構成により、多角的な視野の獲得につながった可能性もあるのではないかと分析しております。

課題としましては、ほどほどの雪対策といった表現を使用しましたが、やはり、個人ごとに解釈に差があるということ、行政としても、結果の活用には課題が残る、具体性に欠けるということが課題として挙げられました。

これらを踏まえ、右側の今回の設計への反映ですが、以下の三つの工夫を盛り込みたいと考えております。

まず、採用する対話の形として、各年代の本音を引き出すため、前半は同世代で安心して本音を

出し、後半は世代をミックスして多様な価値観をすり合わせる、これをハイブリッド対話と名づけ、採用したいと考えております。

それから、北大でのワークショップでも実践しましたサンドイッチ構造です。まず、理想を出発点として、制約を共有した後、現実的な方向性を議論し、理想について再確認するという構造を採用したいと考えております。

その下の道具（議論の素材）としまして、個別の選択肢を丁寧に説明すると、行政としての意図がやや誤って受け止められるリスクがあるということで、これを克服するために複数のシナリオをお示しし、その中にメリットやデメリットを含めて比較できる形で提示をしたいと考えております。

最後の問い（設問設計の工夫）ですが、優先順位、受け入れるための条件をほどほどのような曖昧な言葉ではなく、結果を活用できるように可能な限り言語化していきたいというものです。

4 ページです。

この資料では、トレードオフを明確にして四つの未来像を設定しておりますので、こちらについてご説明いたします。

これらのシナリオについては、20年後から30年後の札幌の冬を持続可能にするために自分たちはどんな未来を選択すべきかという視点で、個人的な好みだけではなく、将来世代も含めた札幌市全体の持続可能性を考慮した上で支持するものを選んでいただきながら、それを対話に活用していただくことを考えております。

一番左のAの快適性優先ですけれども、冬の移動の快適性を優先し、冬でもスムーズな移動を実現するというシナリオです。トレードオフとしましては、現状よりもサービス水準が上がる場合には費用の増加があるということが挙げられます。

Bの地域で支え合うですけれども、地域の力で細やかな除雪を行う場合に行政が活動を支援するという方向性です。トレードオフとしましては、当然、地域差が生じることと、地域負担が増加する可能性があります。

Cの技術に投資ですけれども、将来の担い手不足に備え、自動化などの技術に重点的に投資するというシナリオです。トレードオフとしましては、短期的な効果が小さいことで、つまりは、今すぐに暮らしが楽になるということではなく、むしろ、投資資金を捻出するために現状より低い除雪レベルを受け入れる必要があります。

Dの行動を変えるですけれども、大雪時は無理に動かないことを社会のスタイルにするということで、トレードオフとしては、一定程度、経済活動の抑制が生じるというものです。

これらの四つの未来像を対話の道具として活用していただき、議論を深めていただくことを狙いにしたいと考えております。

当然ながら、グループディスカッションでは、どれか一つを必ず選択しなければならないということではなく、いろいろなものを組み合わせる、あるいは、選択する場合の条件を対話しながら考えていただきたいと思います。

5 ページの三つのテーマと問いの全体像です。

この資料では、何を優先するか、どう受け入れるか、どう暮らすかを市民とともに考えるための論点にひもづく問いについて主にご説明したいと思います。

左側に論点、中央に対応する問い、右側に得られるアウトプットを記載しております。このうち、中央の問いは3回のアンケート調査の中で共通の設問として設置したいと考えております。それによって意識の変化を測定したいというものです。

まず、左上の「①限られた資源で、何を優先するのがよいか」ですけれども、中央の問いでは、Q①としまして、先ほどご紹介した四つのシナリオへの賛成度を各7段階で評価していただきます。Q②としまして、まず優先して進めるものをAからDのうちから一つ選んでいただきます。

これらの問いによりまして、右側のアウトプットでは、四つの未来像のうち、どの方向性を重視すべきかという参加者の価値判断の傾向、それから、各シナリオが内包するトレードオフに対し、どの程度受け入れるお気持ちがあるのかを把握したいと考えております。

中段の「②雪をどう受け入れ、支え合うのがよいか」ですけれども、中央の問いでは、Q③としまして、除排雪の具体的な方向性の受入れ度合いを各7段階で評価していただきます。選択肢としては、幹線・歩道は先にきれいに、生活道路は状況によって遅れる、地域の細やかな除雪は市の支援を受け地域で対応という方向性です。この問いの狙いとしては、サービス水準が変更された場合、それに対する市民の意識を測定したいというものです。

Q④では、地域支援メニューの優先度を各7段階で評価していただきたいと考えております。この問いの狙いとしては、市民が地域で協働するためにどの支援策が最も効果的と考えているかを把握したいというものです。

Q⑤では、まずは充実させるものを五つから一つ選択していただきます。狙いとしては、予算的な制約の中で、まずはどこを優先して充実させていくべきかを明確にしたいというものです。

これらの問いにより、右側のアウトプットでは、どの程度の不便さを受け入れ、どのような条件ならそれを受け入れやすいかという許容範囲、それから、地域の活動を支えるために市が優先して実施すべきメニューを把握したいと考えております。

下段の「③大雪の日の暮らし方のルール」です。

中央の問いでは、Q⑥としまして、大雪時の対応への賛成度を各7段階で評価したいと考えております。選択肢としては、時差出勤・時差通学、在宅勤務・オンライン授業、会社や学校が一定の基準で休む、冬の移動支援、現状としてはこの四つです。

Q⑦は、⑥の取組実施の条件を四つのうちから一つ選択していただきます。選択肢としては、大雪に関する気象情報が発表されたとき、主要な幹線道路で深刻な交通障害が発生したとき、つまり、物理的に交通障害が発生しているとき、公共交通機関の計画運休や大規模な遅延が発生したとき、行政が市民に外出自粛を要請したときとなっております。

これによりまして、右側のアウトプットでは、大雪の際に無理して動かないという社会のスタイルをつくった場合の選択肢とその適用条件を探るものでございます。

6 ページの設計の思想①です。

今回取り入れる構造として、まずはサンドイッチ構造についてご説明したいと思います。

イメージ図として、ちょっと変わった色のサンドイッチをご用意しておりますが、上部の1枚目のパンでは、まず、未来や理想を語っていただきます。制約は脇に置いておき、ポジティブな側面から議論を始め、参加者に雪に対するポジティブなイメージを膨らませていただき、モチベーションを高めたいという目的があります。中央の中身の具では、現実と向き合って対応を深めていただきます。一番下の2枚目のパンでは、制約の中で提案を考えていただくことで、具体的な選択肢について議論を深め、社会全体の視点から具体的、現実的な方策を検討していただくという狙いがあります。

これらによりまして、右側に挙げておりますが、現実的な方策を考える、参加者の納得感の向上を目指す、多角的な視点を育んでいくことで、質の高い議論を形成できればと考えております。

7 ページです。

もう一点のハイブリッド対話の採用ということで、まず、同世代型で議論をした後にミックス型で議論をするというものです。

同世代型の議論では、仲間意識による心理的な安全性といいますか、同じような方々で話し合うことによって、意見がより引き出しやすいのではないかとということと、その後に世代ごとの意見を共有して相互理解を深め、社会全体で最適な視点で考えるということを取り入れたものです。

これによりまして、右側の現実的な課題解決に向けた合意点を探っていきます。

最後に、8 ページです。

こうした複雑な課題に対して、多様な市民と行政が協働して納得感のある解決策を見出すことを目指し、これまでこういった議論のフレームを札幌市として持ち得なかったものですから、今回はこれを検証しまして、最終的には市民参加推進ガイドラインに盛り込んでいきたいと考えております。

フレームの五つのステップとしましては、一つ目が共通土台を形成すること、二つ目が価値の共有ということで何を大切にしたいかをお互いに言葉にしていくこと、三つ目が選択肢について考えることでメリットとデメリットを比較して考えていただくこと、四つ目が方向性と条件の具体化で、それまでの議論を踏まえて一定の方向性を選択していただき、条件も言語化していただくこと、それから、五つ目が大事だと考えておりますけれども、成果の確認と次のプロセスへの引き渡しです。

これを五つのステップとしまして、右側の目指す議論の手法としましては、多様な意見を効果的に引き出すこと、今後も雪対策だけではなくもっと複雑な課題もあると考えますので、それに対して市民と行政が協働して問題を解決していけること、参加された市民が満足度を高めていただいて、次の対話の機会にまた参加していただくことも重要だと考えておりますので、そういった議論のフレームを目指していきたいというものです。

説明は以上です。

○鈴木座長 ただいまの市民ワークショップに関するご説明に関しまして、委員の皆様からご意見をいただきたいと思ひます。

ご質問も含め、何かご意見等がございましたらよろしくお願ひいたします。

○梶井委員 5ページですけれども、Q①のA B C Dに7段階で丸をつけるのですね。例えば、Aの快適性優先も1から7まであります。優先度は7が一番高く、1が一番低いわけですが、A B C Dの全てに7をつけてもいいのですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 全てに7をつけていただくことは可能ですし、可能性としてはあると思ひます。

○梶井委員 その上でA B C Dのうちのどれを一番に優先したいかということですね。

もう一つ、最初のページの目的に20年先から30年先の雪対策とあります。対象者は18歳から79歳です。私なんかは20年先だと平均寿命を超えて死んでいる可能性が高いわけで、自分が死んだ後の雪対策かとなってしまふのです。ですから、20年から30年という具体的な数字が必要なのか、10年から20年では駄目なのか、もしくは、将来の雪対策のあるべき姿では駄目なのか、そこは検討していただきたいです。世代ごとに分かれての話合いのとき、高齢者が自分は生きているかどうか分からないしとなると当事者意識がなくなる可能性もあるかなと思ひました。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 貴重なご意見をありがとうございます。

おっしゃるとおりだと思いますが、市としましては、20年から30年ぐらい先の人口減少が一定程度進んだときにどうあるべきかを考えたいと思っております。

ただ、委員のご指摘のとおり、ご高齢の方はもしかしたら自分がいないかもしれないと思われるということも考慮し、この設定についてはもう少し検討したいと思ひますが、あまり短期的な未来では目的から外れるところもありまして、中長期的な未来について考えていただきたいと思っております。

○鈴木座長 確認です。

札幌市も今は人口減少の局面に入っていますし、人口構成などもあります。今後、人口が減っていく中でそういったデータも示しながら予算規模の話もされると思ひます。その対比といいいますか、バランスを少し情報提供し、表現もあるとは思ひますけれども、20年先、30年先なのか、人口減少がこのぐらいの規模になったときに皆さんはどう考えるのかを確認するというところでよろしいですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） ご推察のとおりです。

やはり、客観的な事実をお示しし、それが誘導にならないという大前提の下、バランスを考慮した上で、予算や人のお話、除雪の技術のお話をきちんとポイントを絞って、分かりやすくお伝えしたいと考えております。

○鈴木座長 そのほかにご意見やご質問はございませんか。

○山崎委員 今までは2回やっていましたが、今回は1回ですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 昨年の市民会議は2回実施したという観点からのご質問かと思ひますが、今回のワークショップは1回です。この先、これを踏まえて複数回実施することは考えられますが、今回は1回やらせていただくということです。

○山崎委員 以前のスケジュールで2回やるみたいなものがあつたではないですか。それは過去のものとして置いておいて、まずは1回ということで、それを踏まえ、いろいろな形でやるかもしれないという理解でいいですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 今回のワークショップは、1回ですが、今後、ミニパブリックスも予定しておりますので、その際にいろいろな方式で実施するということは想定されます。

○奥木室長 追加でよろしいでしょうか。

今回は1回ですけれども、これまでのプロセスとしては、まず、LINEでのアンケートがあります。それで、この間も見えていただいたように、LINEの会員になっている30代から50代の方の意見が割と分かつたところです。あわせて、今回、広報誌に載せた後のLINEのアンケートプラス紙での無作為抽出アンケートというプロセスを踏んでまいりまして、前回、その結果をお話したところです。

並行して、雪対策審議会を1回行っています。小委員会が二つあるのですが、それぞれ1回ずつ開催されております。今度は、アンケートではなく、市民の皆様の意向を把握させていただくとい

うプロセスとなりまして、いろいろな手法を用いて対面でお話をいただいた上で、現在の情報をお出しし、今の市民の方々の思いを探っていくということです。

それを審議会や小委員会等にフィードバックし、そこでの議論が煮詰まってくると、またミニパブリックスを行うという感じです。

これを昨年度は2回やりましたけれども、回数も含めて検討し、そういった形での熟議の段階がこの先にあるのだろうと思っております。今回はそういった意向把握のプロセスの中での対面でのものだということでご理解をいただければと思います。

○鈴木座長 そのほかに何かございませんか。

○梶井委員 3ページの図①ですが、尺度を使うのはすごく厳しいと思うのです。市民が積極的にやりましょう、できる範囲でやりましょうとあって、不便さを許容するというのはしないよというのは、我慢しようよ、自分はいらないよという人だという解釈でよろしいですか。不便さを許容というのがちょっと曖昧で、選ぶ人としてはちょっと迷うかなと思いました。

○鈴木座長 何に対しての不便さということでしょうか。

○梶井委員 不便さを許容するから市民はしなくてもいいということになりますよね。5は市民が積極的にですから。そこもはっきりさせたほうが選びやすいかなと思いました。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 前回もご指摘いただいた点でした。実は、北大のワークショップは前回の会議よりも前に実施しておりましたので同じ設問を用いましたが、今回のワークショップでは、改めてこの尺度で調査するということは予定しておりません。

○鈴木座長 表現なども少し考えていただいて、皆様から何かよいご意見やアイデアがございましたら、お寄せいただきますようよろしくお願いいたします。

そのほかに何かございませんか。

○三上委員 1ページの目的が雪対策審議会の議論や市民会議の論点設計のための基礎資料となっているのですが、審議会ではこの論点を知りたいということでマッチしているのですね。その議論はちょっと分らないのです。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 論点としてこういうものが必要だというのは審議会においては議論しておりませんが、審議会とそれにひもづく小委員会の資料や会議の結果を参考にしつつ設定しております。市民意識の傾向を探ることにより、今後の議論の基礎資料として活用していただきたいという位置づけです。

○三上委員 分かりました。

○鈴木座長 コメントをよろしくお願いいたします。

○事務局（田村未来創生担当課長） 未来創生担当課長の田村でございます。雪対策審議会の事務局を取りまとめる立場として一言だけ補足をしたいと思います。

これから雪対策審議会での議論を進めていくに当たって、やはり、市民の意見、意向を浮き彫りにする必要があると思っております。あくまで今回のワークショップが全てではないですし、先ほど室長の奥木からもありましたとおり、これからさらにやっていくということもあるかと思うのですが、現段階で市民に対してこういった取組をしたときにこういった意見が出たということは審議会の中でご報告させていただき、それを踏まえ、例えば、どんなことをもう少し深掘りしていきましょう、こんなご意見があったのであれば、こういったことを考えなければいけないなど、審議会の中でご意見としていただくということをイメージしております。

○鈴木座長 そのほかに何かございませんか。

○片山委員 今回も世代別に議論という計画ですね。年齢は何を代表して反映しているのか、疑問です。

前回の成人式のときは、祝う側である年配の人たちと祝われる側である若者で受け止め方が違うという前提がありました。社会に対する物の見方や生き方とか、社会はどうあるべきかという考え方に差が出てくるという前提があったので、年代別で議論することに意味があったわけです。

今回は、10代も20代も30代も、もしかしたら退職前までは会社員や学生という立場で、雪に対してはなるべくスムーズに会社や学校に行きたいという意味では同じ属性の人たちかもしれないので、年代で等しく人数を分けたとしても同じような人たちを集めたにすぎなくて、意見が偏ってしまう議論になるかなと思いました。

一方で、退職者とか、リモートワークが可能な人とか、雪対策を熱心にやっている町内会やボランティア経験者たちを一定数入れて議論をすることに意味があるとしたら、この年代別というくくりが今回はあまり意味をなさないかもしれません。市民の声を代表させる上においてはその切り分

けが不都合になるかもしれないという気もしたのですけれども、どうですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） まず、考え方としましては、同世代ごとに議論はするのですけれども、その後、年代を交ぜるということで、必ずしも偏った意見にはなりにくいのではないかと考えております。

次に、世代ごとだと違いが分からないのではないかとというご指摘ですけれども、アンケートで見えてきているのは、例えば、若年層だと、集合住宅にお住まいの方が多い、通学、通勤に意識がある、それから、現役世代の方だと、いろいろな家庭のご事情がありつつも、朝、起きたときの雪かきもしなければならないといった雪対策の質に対するご不満があります。あるいは、ご高齢の方は身体的な負担が大きいなど、特色はあったと市としては考えておりまして、世代ごとに議論することによって、むしろ、今回はどういう考え方の違いがあるのかを明確にしたいという狙いがあります。

○片山委員 前回の成人式のときと同じようにやりましたと言ってしまうと、受け止め方にそごが出てくるかもしれないので、そこが説明できればいいのではないかと思います。

○鈴木座長 では、三上委員、よろしくお願いいたします。

○三上委員 今出ていた年代の議論については、年齢でライフステージは変わり、それぞれの生活も違うと思います。雪への対応能力というのは、多分、体力の話です。雪との付き合い度合いでいくと、長年の人は、もう慣れっこになっていて、どこまで受け入れるかで、若い方は、自分がいよいよ家庭でやらなければいけないとか、学生でこちらに来て初めてやらなければいけないとかで、雪との付き合いが短い方々との違いが出るのかなと思います。

ワークショップで年代別とミックスをやることの最大の意味は、同じ年代で実施すると共通点が多いので一番分かりやすいのですが、それにもかかわらず、考え方が違い、その違いにぶち当たることがすごく大事だと思いますし、いろいろな気づきがあると思うのです。

逆に、違う世代でも今度は同じ考え方の人もいるんだということに出会うのは、これはもう事件でも事故でもなく、必ずあると思います。そこを感じるということに世代を超えて実施することと同じ世代で実施することの意味があるので、結構、意図してこれをやるということに意味があるのではないかと思います。ですから、前と同じというより、そういう説明をちゃんとすればいいのかなと思いました。

○鈴木座長 そのほかに何かございませんか。

○大村委員 4ページの対話の道具としてシナリオが4パターンあるのがイメージする際にすごくいいなと思いました。

ただ、今回の目的が20年後から30年後ということで、今、三上委員からもあったように、ライフステージが変わっていく過程を考えると、このイメージももう少し段階的なイメージとして把握できたほうがいいのかと思っていました。30年後に向けてこれを目指していくけれども、やっぱり短期的な2年後や3年後のイメージも分かっていたほうが判断材料になるかなと思いましたので、可能であれば20年、30年の間の段階的なイメージも、必ずそうなるというわけではないとしても、考える際に材料としてあったらいいのかなと思いました。

○鈴木座長 短期の意識と中長期での意識といいますか、短期的にはこうだけれども、長期的にはこう考えるなど、少し分けて取ったほうがいいということですね。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 貴重なご指摘をありがとうございます。

ご意見を踏まえまして、当日、カードのようなものをお示ししたいと思っています。今回は紙面が限られているのでシンプルになっていますけれども、今いただいたご指摘のように、短期、中期、長期みたいな見せ方も検討したいと思います。

○鈴木座長 では、三上委員、よろしくお願いいたします。

○三上委員 今の4ページの話です。

先ほど梶井委員からもありましたけれども、全部を7段階で評価するのですけれども、この四つの中からどれに進むべきかを議論して一度決めてしまうのです。そのときに、自分の中でこれもあれもいいよねとなって、この四つから選択しなければ駄目ですかとなったときに結構困るかなと思います。

ガードレールは結構狭めになっているので、ここは自由な考え方で、あれもこれも工夫してやったらできるのではないかと市民が議論をして、あるべき姿を工夫して自らがやるべきことを考える、このワークショップの一番の醍醐味であるところがちょっと薄れるワークショップになりそうだなと思いました。それこそ、防災ゲームみたいな感じの選択式で全部がいくような感じです。20

年、30年という、時代は全く変わっている、技術で何でも変えられると私は思っています。

20年、30年後のことを考えるのだったら、もう明日からやったほうがいいのではないかとことです。明日からでもやったら20年後、30年後はもっと別なことができることになります。もしかしたら、その市民の自由さのある意見を出せないワークショップになるのではないかとということが一つです。

それから、この四つのシナリオは、例えば、2軸で、何と何を軸にして、どこに当たるのかというマッピングがしにくいのではないかなと思います。お金の話と利便性、快適性の話だとは思いますが、お金も経済活動と経費をどう抑えるかが入ってきてしまっている、それを両立できますよねみたいな話が出てしまうのかなと。

せっかく市民の皆さんが40人もいるので、湧き出てくるアイデアをどう収穫するのは工夫しないと不満が残ります。ただ選択をして、どれを選ぶのか、いや、そこは考えなくていいですからみたいな感じになってしまうかなと。未来志向と言いながらも、選択式の、つまり、おいしいサンドイッチをつくらうとしているけれども、そのおいしさが分からないうちに終わっちゃったねとなりそうということです。区役所の中で、あれっ、笑い声が全く出ないけれども、どうする？みたいな感じで、テスト的に一回やってみても面白いかなとは思いました。

心配事としてはそんな感じです。細かいことはたくさんあるのですが、今日は時間がないので、別の機会にしてもよいかなと思いました。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 個人の調査票では7段階でシナリオを評価していただくという構成になっていますけれども、グループワークは、委員のご指摘のとおり、一つだけ選ばなければいけないということではなく、むしろ、ポスターをつくっていく段階でAとBの掛け合わせがいい、こういう条件なら受け入れられるといったことも反映していただけるような設計にしたいと思っております。

私の説明が不足して居りまして恐縮ですが、AからDのうち1つだけを必ず選択しなければならないわけではありません。

○鈴木座長 そのほかに何かございませんか。

では、私から考え方について一つお聞きします。

1ページのワークショップ開催に関し、選出方法のところに年齢、性別、居住形態、居住地域などとあります。私も雪の多い地区に住んでおりますけれども、これは非常に重要かと思っています。

私のこれまでの生活を考えますと、一つ影響してくると思われるのが積雪寒冷地での居住年数です。札幌は道外から来られる方も多いですし、北大なんかもそうだと思います。私の義理の弟も北大に来ていて、1日で自転車が埋まってしまって、もう嫌だと言って北海道を出てしまったのです。そこまで細かく知る必要はないですが、居住年数を把握したほうがうまくいくのではないかなと思いました。

もう一つは、居住形態も確かにあるのですが、移動手段が結構考えられるのではないかなと思っています。最近では、私も交通計画をやっていますので、公共交通の人手不足やバスの減便、また、地下鉄の快適性なんかもあるのですが、通勤、通学のみならず、通院や買物の際にこういった移動手段といいますか、札幌は自動車交通が非常に多いので、公共交通で通う場合と意識に差が出てくるような気がしています。

あれは何年前でしたか、物すごい大雪のときでバス路線も幹線しか走れませんかということがありましたよね。

○事務局（田村未来創生担当課長） たしか令和3年度の冬だったかと思います。

○鈴木座長 4年前でしたか。そのときも、1時間遅れということもあったかと思います。これは限られた人数でのワークショップですので、バランスよくというのは難しいかもしれませんが、事前にそういったことも情報として得つつ、メンバーを選出することも重要ではないでしょうか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 既に案内を発送しており、属性もお聞きしているのですが、今、座長がおっしゃったような居住年数や交通手段まではお聞きしていないので、グループ分けには活用できませんが、調査票の中にそういった項目を設けて事後的に把握することは可能だと思いますので、検討したいと思います。

○鈴木座長 ちょっと細かい話ですが、よろしくお願いいたします。

そのほかに何かございませんか。

○三上委員 5ページで、これもアンケートとしてはもう入れて送っているということですか。こ

の問いというか、内容が人それぞれで把握度合いが違うというか、イメージが変わってくるかなと思います。例えば、②の雪をどう受け入れ、支え合うのがよいかを選ぶ問いで、幹線・歩道は先にきれいにする、生活道路は状況により遅れる、もう一つ書いてありますけれども、この三つのことを度合いで見るということですか。それとも、この一つ一つの度合いを測るということですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長）ここに書いてある問いは、当日の参加への調査票に設問として設けたいという案で、まだ変更の余地があるといえますか、これから詰めていきたいと考えているものです。

○三上委員 こういう項目を入れていくということですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長）そうです。このほかにも、先ほどの属性のお話やいろいろな設問を設けたいと思っておりますが、その論点にひもづく主なものとして今回は記載させていただいております。また、Q③に関しては選択肢ごとの7段階の評価をしていただくというものです。

○三上委員 心配だったのは、実施することは書いてあるのですけれども、それが自分にとってどんな状態になるのかがイメージできないと、いや、いいんじゃないといって選んだはいいけれども、ある人はこちらを選んで、だって、こういう状態になってしまうんだよ、あなたはこれで学校に遅れてしまうよとなると、では、駄目だねとなるので、例えば、こんな状態になりますということは書いてあってもいいかなと思いました。実施することとどんな状態になるのかを明確にしたほうが選びやすいかなと思いました。

○鈴木座長 状況をイメージしやすくということですね。

○三上委員 そうです。雪のことですし、若くなればなるほど、学校に行っているうちに除雪されていたりしますから、市がやるのを見ているわけではないので、その状態がどういう状態なのかが分からないかなと思うのです。年代によっては自分が体験していないこともあると思うのです。お年寄りには除雪をやっているのを見えていますけれども、若い人は学校に行っているうちに除雪をやってもらっているの、それがどんな状態かを分かっているかもしれないということです。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長）承知しました。

いただいたご意見を踏まえ、当日までによりよい設問になるように工夫してまいりたいと思います。

○鈴木座長 具体的なものに関しましてはまた検討するような機会があるということですのでよろしいですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長）検討会自体は、次回、もう終わってしまった後のご報告になると思いますので、適宜、成果物といいますか、調査票やお送りする事前の情報提供資料は、これまでどおり、会議外のメールなどで共有し、ご意見を頂戴したいと考えております。

○鈴木座長 よろしく願いいたします。

2. その他

○鈴木座長 最後に、皆様から全体を通して何かお気づきの点など、質問する機会を逃したというものがございましたら、出していただきたいのですが、いかがでしょうか。

（「なし」と発言する者あり）

◎閉 会

○鈴木座長 それでは、以上をもちまして第2回の検討会を終了させていただきます。

本日は、どうもありがとうございました。

以 上